

神ノ川ヒュッテの危機 秋の行楽シーズンに大打撃

今秋10月12日に日本上空を襲来した台風19号は、各地に被害を与え、ここ相模原市緑区ではあちこちで地すべりが起き、民家が何件も土砂により倒壊した。また、丹沢山塊にも鋭い爪痕を残した。青根地区から神ノ川ヒュッテまでの道はことごとく崩れ落ちてしまい、現在も通行止めである。道路が通れなければ現地へ確認に行くこともできない。ようやく秋めいて紅葉が始まろうかというこの時期に、神ノ川周辺は大災害を被ってしまった。



神之川の主 関戸基法さんの突然の悲報

久保沢 JA 会館にて10月20日（日）通夜／21日（月）告別式
葬儀には関戸基法さんを偲び長蛇の列

津久井青根の神之川の主といわれた神之川キャンプ場経営関戸基法さん（82歳）が台風19号で帰らぬ人となった。生前の協力を謝意を述べ、神ノ川ヒュッテ代表の杉本憲昭、ヒュッテ管理人岸百合子、陣馬山峠の茶屋管理人田村明雄等が通夜・告別式に参列しました。

続丹沢山麓雑記 山峡の譜 地元作家の山口文一著

この本は、今から33年前の1986年9月に神奈川新聞出版局より販売されました。私も以前著者の山口氏を青根東野のご自宅へお迎えにあがり神ノ川ヒュッテにお招きし『神ノ川の夜話し』として講演の機会をいただいたものです。本書は丹沢の自然と人々の営みが「いろりはた」談義として語られたものである。以下は本書の一部を抜粋し転載した。奇しくも若かりし関戸基法さんがここに登場している。

関戸さんのご冥福をお祈り申し上げます。

神ノ川ヒュッテ主人 杉本憲昭



●谷底から出た御神体

二月十六日、今夜はいやに冷え込むので一杯引つ掛け、何つとも早く早く布団に潜り込んでいたら、突然電話がかかって来た。電話の主は、立石建材株式会社でやっている神の川砂利採掘場の関戸基法君からであった。基法君は、些か興奮気味で「ブルトーザーで谷底を浚っていたら、山の神様の御身体らしき物が出て来た。ご粗末に扱って罰が当たっては大変なので、安全な所に運び出し、御神酒を供えて置いたが、今後、如何したらよかるうか？」と、言うのである。今の山の神様は、一〇年ばかり前、確か昭和五〇年だったと思う、祠が最早風雪に耐えられなくなっているの、当時津久井町の議会議員をしておられた佐藤満さんと、津久井町青根林野管理委員会の委員長柳川奇忠さんと、私の三人が発起人となって、近郷近在の有志のご協力を得て建立したものである。そんな関係を知っていて、基法君は私に連絡して来たのである。兎に角、現物を見ないことには始まらない。もし、本物のご神体だとすると、祠にお祭り申し上げねばなるまい。基法君には、佐藤、柳川両氏に相談して連絡します、と言って電話を切ったのであるが、ことがことなので、その手で佐藤さんに電話をしたら、明日神の川に入ろうと言う。明日は二月十七日、四季会の東京例会である。東京例会の皆さんに忘れられる程欠席しているし、俳句の方ももっと頑張らねばと思っていたので、明日は勘弁して下さい、と言ったら、佐藤さんは、俺一人で来ると言っていた。佐藤さんとの電話を切って、再び布団に潜り込んだのであるが、神の川の谷底から出て来た山の神様の御神体とは、一体如何なるものなのか？今夜はなかなか眠れそうもない。

●まぼろしの部落

正面に、山神大社、諏訪大社と並び、その下に「神璽」と大きく刻まれているのである。ここまで、まあ、どうか読めるが、その次が読めない。文字が一高小さいのと、台風の度に神の川の谷底で揉まれているのであろう。欠けたり擦り減ったりして、文字が定かでないのである。首を捻っていると、中山さんが、手拭いを水でしめして来て、碑の表面を「サーッ」と拭いたのである。すると、処どころ切れてはいるが乾いた部分が浮き出し、どうにか読めるのである。向かって左側に小さく、村社氏子、関戸平左衛門、大正八年一月建之、その横に、更に小さく、青根石工、神山興四郎と刻まれている。石の大きさは、縦一メートル、下巾一メートル五センチ、中巾九〇センチ、厚さ約二〇センチ上部は三角形の「むすび形」である。重さはどのくらいあるのか？三、四人で動かして見ようとしたが「ウン」とも「スン」とも言わない。ことによると、三〇〇キロから三五〇キロぐらいはあるかも知れない。

神の川に人が住むようになったのは何時頃か定かではないが、部落の古老の話によると、天正一八年、豊臣秀吉に敗れた小田原城の落人が丹沢山を越えて来て、住み着いたのが始まりだと言うことである。なんでも、軍資金を沢山持っている武將で、その落人の住家を誰言うとなく長者小舎と言ひ、長者舎の字名にもなったのだと言うことである。この話、私は決して眉唾ものとは思っていない。だから、基法君が谷底から掘り出した「山神社の御神体」なるものには、ことによると、私が密かに探っている神の川部落のことを知る新しい手掛りのようなものが掴めるかも知れないと、胸を踊らせたのである。しかし、大正八年の建立とあっては、小田原城が落城したのが天正一八年であるから、今から三九五年前のことであって、大正八年からは、更に、三三〇年も遡る分けた。とても、落人部落とは繋がって来ない。神の川部落は、又また、まぼろしの部落となってしまった。